

令和4年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人神戸市民文化振興財団	
施 設 名	神戸文化ホール	
助成対象活動名	人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	6,494	(千円)
	0	(千円)
	685	(千円)
	5,809	(千円)

(2) 令和4年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	アートマネジメント人材養成講座	実施日程：令和4年7月11日～令和5年1月29日（うち10日） 主な実施会場：神戸文化ホール	①現場体験インターンシップ 参加前オリエンテーション（1時間） オンラインにて開催（zoom使用） （以下インターンシップ対象公演） （1）こどもコンサート（2）舞台機構講座「舞台のつくり方編宙のソラミミ」（3）チャレンジ・ジャンボリー2022 ①前日②当日（4）フルートコンクール関連事業①中学・高校生のためのフルートクリニック ②「コンサートへ行こう！」 ②舞台機構講座「舞台のつくり方編宙のソラミミ」出演：隅っこ人形劇団ニッチ 演出：エレコ中西 ③キャリアプラン講座～一線で活躍する女性アート・マネージャーを迎えて （1）講師：唐津絵理 愛知県芸術文化センターエグゼクティブプロデューサー （2）講師：志賀玲子 城崎国際アートセンター館長 （3）講師：新井鷗子 横浜みなとみらいホール館長・東京藝術大学特任教授 オンラインによる双方向受講可能なサテライト会場を設定：兵庫県豊岡市の兵庫県立芸術文化観光専門職大学	540名 （セミナー80名×3回、舞台講座200名、インターンシップ参加者50名、オンライン受講者50名）	437名 （セミナー3回計111名、舞台講座154名、インターンシップ参加者のべ30名、オンライン受講者のべ142名）

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和4年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	こどもコンサート「海はひろいな おおきいな」と関連ワークショップ	ワークショップ型 令和4年6月26日～7月23日 会場：こども本の森神戸 コンサート 令和4年7月23日(土) 会場：神戸文化ホール大ホール	○ワークショップ：子どもを交えての即興・創作演奏 ○コンサート：石崎真弥奈(指揮)、安永早絵子(打楽器、進行)、神戸市室内管弦楽団、神戸市混声合唱団 〈内容〉オープニングアクト モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク、即興演奏、シューマン：交響曲第3番「ライン」より 第1楽章、中村滋延：四季のラプソディ「春から夏へ」、童謡、唱歌、鶴見幸代：竹野相撲甚句ファンファーレゲエの大冒険	目標値	ワークショップ型公演100名、コンサート700名
2	令和4年度 神戸国際フルートコンクール関連事業	①中高生のためのフルートクリニック：令和4年6月19日(日)・7月16日(土) ②第10回神戸国際フルートコンクール優勝記念演奏会：令和5年2月23日(木・祝) ③コンサートに行こう！令和5年1月29日(日) ①練習室 ②③神戸文化ホール中ホール	①講師：江戸聖一郎、竹林春奈、深江亮太 ②出演：ラファエル・アドベス・バヨグ、マリオ・ブルーノ、鈴木華重子、西尾恵子、井上隆平、亀井宏*、伝田正則 ③出演：押部朋子、居石和代、木下愛子	目標値	1,210名 (フルートクリニック30名×2回、記念演奏会有料350名・ユースシート200名、ファミリーコンサート300組のべ600名)
3	神戸文化ホール チャレンジジャンボリ—2022 ああオルタンシア!ナゾトキぐるぐるびゅんびゅん大劇場!! (でも中ホール)	令和4年11月26日(土) 神戸文化ホール中ホール	企画アドバイザー：若旦那家康(コトリ会議) 構成台本：山本正典(コトリ会議) 演出・進行：大熊隆太郎(壱劇屋) 謎問題作成：宮地泰史(七国プランニング) 出演：平林之英(sunday)、ボブ・マーサム(THE ROB CARTON)、佐々木ヤス子(サファリ・P)、大熊隆太郎(壱劇屋) ほか 神戸市立室内管弦楽団員5名	目標値	700人 (本公演600人+イベント100人)
				実績値	328人 (本公演239人+イベント89人)

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p>
<p>神戸市の基幹文化施設・芸術文化の創造発信拠点である神戸文化ホールは、①「神戸からの創造・発信を行う」、②「地域社会の絆をつなぐ」、③「人々に活力を与える」、④「学び、トライできる場となる」をミッションに、市民の文化振興に資する事業を展開している。</p> <p>また、古くから国際都市として発展してきた神戸は、全国的に高い知名度を有するが、近年では他政令都市に比べ人口減少率が高く、「神戸ブランド」を強化し「若者に選ばれるまち」となることが求められている。令和8年度以降には、都心三宮の再整備と並行して新・神戸文化ホールを開館（現在のホールから移転）する予定で、新ホールに向けて「創造的人材育成と活用」「普及啓発拠点」といった機能も強化していく必要がある。</p> <p>令和4年度の助成対象事業は、これらのミッション遂行の中心的な取り組みとして、①演劇、舞踊、音楽、伝統芸能、芸能などの優れた作品に観客・聴衆が気軽にアクセスできる ②社会のあらゆる立場、事情にある方々へも文化芸術の力を届ける ③アートマネジメントに携わる人材の活躍の場を拡大する といった3点に重点を置き、適切な事業計画を組み立てた。</p> <p>令和4年度の助成対象事業では、人材養成事業・普及啓発事業いずれも、概ね当初の予定通りに事業計画を実施できたため、当劇場の社会的役割や地域の特性等に基づいた事業の実施ができたものと判断している。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p>
<p>人材養成事業においては、現場体験インターンシップと舞台機構講座、キャリアプラン講座を実施し、アートマネジメントを学んでいる大学生・大学院生、文化芸術団体（劇場・音楽堂、実演団体）に所属するスタッフ437名に受講いただいた。本事業の実施により、地域文化振興に資するアートマネジメント人材のキャリア開発に貢献し、ひいては文化・芸術の水準の向上に寄与すると考えられ、文化的意義が認められる。</p> <p>また、複数の大学と連携し、神戸大学では授業として当事業を採用いただくなど、産学連携の体制の確立がなされたことから、社会的意義にも応えられているものと考えている。</p> <p>※連携大学：神戸大学、大阪音楽大学、武庫川女子大学、兵庫県立芸術文化観光専門職大学（兵庫県豊岡市）、群馬県立女子大学、エリザベト音楽大学。</p> <p>普及啓発事業については、3事業を実施し、広範なエリアから3,274名に会場・参加いただいた。</p> <p>「チャレンジジャンボリー2022」では、全国的な発信力を持つ関西圏の魅力的なアーティストや、近隣文化施設で活躍するスタッフと連携しながらプロジェクトチームを作り、地域の文化資源を最大限活かして新たなプログラムを開発し、当館のプロデュース力の向上にもつながった点で文化的意義が認められる。</p> <p>「子どもコンサート」では、コンサート開始に向けて6月28日：神戸市立いぶき明生支援学校、7月5日：神戸市立青陽須磨支援学校、で神戸市室内管弦楽団によるアウトリーチ事業を行い、支援学校の子どもたちに音楽に親しんでもらう機会を提供した。同時に、当財団側ではホールに支援学校の子どもたちを迎えるときに配慮すべき事項について具体的に学び（場内の照明は点灯したままにすると子どもたちには不安がないなど）、当日の運営に活かした。このように当事業には社会的意義も盛り込めた。</p> <p>「フルーツコンクール関連事業」では、記念演奏会を中心に国際的に活躍する若いフルーティストが集うことで、多方面からの集客が可能となり、その結果コロナ禍でダメージを受けた地域のレジャー産業に貢献するなど、一定の経済的意義があったと考えている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

1. 人材養成事業

指標①：セミナー受講者数 80名（一般50名 学生30名）

実績：セミナー1 会場一般30名 会場学生9名 オンライン一般20名 オンライン学生21名 計80名

セミナー2 会場一般30名 会場学生5名 オンライン一般20名 オンライン学生38名 計93名

セミナー3 会場一般33名 会場学生4名 オンライン一般20名 オンライン学生23名 計80名

総計253名となり、セミナー3のみ学生数が到達しなかったが、全体として指標を超え、達成できたと考える。

指標②：受講者（一般枠）の所属先 8団体 広域からの参加を望みたい。神戸市の隣接市が8つあることから、8団体以上からの参加を目標とする。

実績：セミナー1は8団体、セミナー2は10団体、セミナー3は11団体と、地方公共団体や民間のホール、楽団など、3つの講座にのべ20団体からの受講生が集まった。その所属先は近畿圏を中心に（公財）さいたま市文化振興事業団、香川県民ホール、（公財）鳥取県文化振興財団など広域にわたった。指標は達成されたと考える。

指標③：受講生の満足度 「とても良い」「良い」をあわせて50%以上

終了後アンケートでの満足度は「良い」以上が95.6%（「大変よい」68.9%、「良い」26.7%）となり、指標の50%以上をクリアした。予想を超えた高評価をいただいたと考える。

2. 普及啓発事業

指標①神戸市外の来場者割合を30%

指標②来場者のうち、10代の割合を30%

■事業1

①神戸市外の来場者割合 63.7%（達成）

②アンケート回答者に占める10代以下の割合は3%だが、大人の回答のうち子ども（中学生以下）の同伴がある方が78.1%（達成）※公演の性質から未就学児、障害のあるお子さんも多く、10代の子どものみでの来場は少ないが、子連れでの来場が78%と、想定している対象、客層に届いていると考えられる。

■事業2

(1)神戸市外の来場者割合 34%（達成）

(2)回答者に占める20歳未満の割合 27%（未達成）

記念演奏会については、東京や九州など関西圏外からの来場者も一定数見られた。また、フルートクリニックや「コンサートへ行こう！」において、普及啓発の観点からも幅広い世代・地域において新たな観客層となりうる人々の興味を引き付けることに努めたが、20歳未満の割合は一歩及ばず、次年度以降SNS等も活用したさらなる広報に努めたい。

■事業3

(1)神戸市外の来場者割合 61.9%（達成）

(2)来場者のうち、10代の割合 30.9%（達成）

・昨今流行している「謎解き」という形態をとったことにより、謎解き目当てで市外から劇場に初めて訪れる層が多くあった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

新型コロナ禍の感染拡大が継続し、先が読めない状況下、「人材養成事業」のうちの「大学生による現場体験インターンシップ」を実施には一考を要した。令和3年11月に作成した「助成金交付要望書」では、インターン生を全員集めた集合オリエンテーションを「参加前オリエンテーション（2時間程度）を実施予定会場：神戸文化ホール多目的室（時期未定。令和4年4月決定）」と構想して記載したが、令和4年4月提出の「助成金交付申請書」においては、「参加前オリエンテーション（1時間）令和4年7月11日（土）14時～15時 オンラインにて開催（zoom使用）」とオンライン開催にする旨として実際の計画を立てた。その時点での大学での授業のオンライン開催の有無、また、新型コロナ禍でのオンラインミーティングの普及などを考慮した結果である。

このようにオンラインでの打ち合わせを積極的に採用した結果、当該オリエンテーションは予定どおりオンライン会議システムを活用し（写真参照）、計画に従って効率よく実施することができた。また、連携大学の教員も参加することができた。

普及啓発事業については、集客面も含めた相乗効果をねらいとして、各事業で連携し、開催時期を夏・秋・冬とずらして設定し、計画どおり実施した。

このように令和4年度は人材養成事業、普及啓発事業ともに、すべての事業が計画どおりに実施、運営することができ、事業の回数、期間ともに適切であった。



アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

人材養成事業、普及啓発事業ともに事業費は適切で、全体的に経費の節減にも努めた上で、当初の計画通りに進んだと考えている。

特に、「チャレンジジャンボリー2022」では、関西圏を活動拠点としつつ全国的な発信力とネットワークを持つ演劇関係のキャストやスタッフが集結したことによって、本来はホールのリハーサル室や会議室で行うべき稽古や打ち合わせ等を、劇団関係者の関連施設や事務所などを使って実施した。その工夫が事業費の配分や効率の良い執行につながり、結果的に質の高いクリエイションを適切な事業費で計画通り実現することができた。



(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

「人材養成事業」のアートマネジメント講座では、「キャリアプランニング」をテーマに3回の講座を組んだ。SDGs（持続可能な開発目標）の「ジェンダー」の視点から舞踊や音楽の分野の第一線で活躍する3名の女性アート・マネージャーを講師として迎え、体験談や現場の実情、アドバイスを伺った。「女性のキャリア」に焦点を当てたことで類例のない創造性ある視点を獲得したと考える。参加者からのフィードバックの「良かった点」でも「講師が女性であり、プライベートでの（女性ならではの）苦労や努力も話してくださったところ。」「女性ならではの葛藤（旧姓使用や託児、介護の問題など）について、非常に具体的かつ臨場感に溢れるお話が伺えてとても勉強になりました。」との声が寄せられている。当財団の専門人材である2名の女性プロデューサーのネットワークを活用した事業で地域の文化拠点としての役割を果たした。

「普及啓発事業」の「こどもコンサート」では、鶴見幸代作曲「竹野相撲甚句ファンファーレ」を初演。これは、北前船の寄港地として栄えた兵庫県竹野町に残る「竹野相撲甚句」をリサーチした作曲家3人のユニット「日本相撲聞芸術作曲家協議会（JACSHA）」が2018年に

作曲した「竹野相撲甚句ファンファーレ」を、鶴見幸代がオーケストラと合唱用に再創造したものである。日本独特の活気あるリズムをもとに、合唱団全員で四股を踏み（写真1）、客席で自由に動き回ることができた子どもたちは大いに盛り上がった。地域の文化資源を使った創造性あふれる上演であった。



写真1 「こどもコンサート」 撮影：小澤秀之

「チャレンジジャンボリー2022」では、専属楽団である神戸市室内管弦楽団メンバーで編成する演奏班と、関西圏を活動拠点としつつ全国的に活躍する旬な劇団関係者による演劇班に、近隣の文化施設のプロデューサーがアドバイザーとして参加するプロジェクトチームを結成。地域の文化拠点として、地域の文化資源を最大限に活かすことで、ゲーム（謎解き）と舞台芸術が作品の中で混在する全く新しいプログラムを生み出した。



写真2 「チャレンジジャンボリー2022」
(神戸文化ホール)

「フルートコンクール関連事業」ではさまざまなネットワークを駆使し、地域サポーターの応援を得るなどして過去40年に遡るコンクールの開催実績を活かした運営力を発揮し、コロナ禍でも国際プログラムを安全かつ円滑に運営することが出来た。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

普及啓発事業「こどもコンサート」のロビーでは、演奏された「竹野相撲甚句ファンファーレ」の素材となった兵庫県竹野町に伝わる「竹野相撲甚句」化粧まわしが展示された（写真1）。

神戸市を擁する兵庫県の、地元の無形文化財について、こども連れを中心とする来場者たちに紹介することができた。また、この公演では、場内を暗くせず、ドアも解放したままでの上演という、こどもや障がい者にとってハードルのないかたちをとったことで、社会包摂の視点からも地域に開かれた文化芸術を味わう場として機能することができた。



写真1 「こどもコンサート」ロビー。撮影：小澤秀之

「チャレンジジャンボリー2022」では、周辺を広場や公園に囲まれた劇場の特徴を活用し、コロナ禍への対策も兼ねて、オープンエアで周辺を散策する人々や近隣住民などにも広くアピールすることのできる新しい演劇を制作した（写真2）。

これにより、屋外の広々とした空間での鑑賞体験を創出し、開かれた劇場という印象を地域に与えることができた。また、前項で記載したプロジェクトチームでの取り組みによって、参画したアーティストのより大きな成長にも貢献することが出来た。



写真2 「チャレンジジャンボリー2022」(大倉山公園)

人材養成事業「大学生インターンシップ」では、神戸大学より4名、武庫川女子大学から5名、群馬県立女子大学、愛知県芸術大学、芸術文化観光専門職大学より各1名ずつのインターンシップ参加者があり、半数以上の学生がひとり2回以上の事業に参加した(写真3)。複数回の参加が多かったことで、多角的なもの見方が身につく、ホールスタッフとのコミュニケーションの質も高まったと考える。終了後のアンケートの「参加して良かった点」として「普段観たことがない公演に携われてよかった」が最も多く選択されてそれを裏付ける。神戸大学はこの事業を正規授業として採用し、成果報告会も授業の場で実施

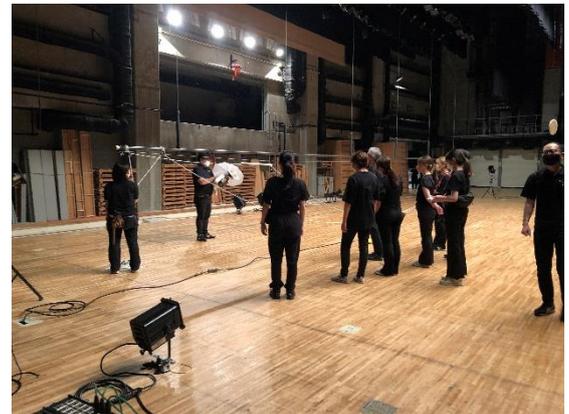


写真3 「舞台講座」

された（令和5年2月15日）。現場と大学教育がつながり、地域のアートマネジメント界を支える人材の育成に一役買うことができた。また当事業は、研究者グループである「アートマネジメント人材養成事業調査チームメンバー」（関鎮京（北海道教育大学）、梶田美香（名古屋芸術大学）、佐藤良子（芸術文化観光専門職大学））による事例調査の対象に選ばれ、参与観察やアンケート調査等が行われた。成果が学術面からも検証されることは、地域への還元へとつながっていく。同じく人材養成事業のキャリアプランニング講座にはのべ20団体からの受講生が参加し、講義後の有志による茶話会も毎回開催、広域ネットワークを形成する交流も行われた。地域の実演芸術振興に資する機会であったと考える。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

(1) 妥当性および(3) 効率性の欄に記載したとおり、ミッションに基づいた事業計画を立て、着実に事業を実施してきたと考えている。また、(2) 有効性に記載のとおり、目標とした指標を達成したことからも、事業の組み立て・実施方法は有効であったと評価している。

持続的発展に向けては、図1に示す「ACTION」が重要である。

事業の結果・分析を受けて、さらに事業運営・組織活動を改善していくため、次の行動として以下の「ACTION」を実施、あるいは計画中である。

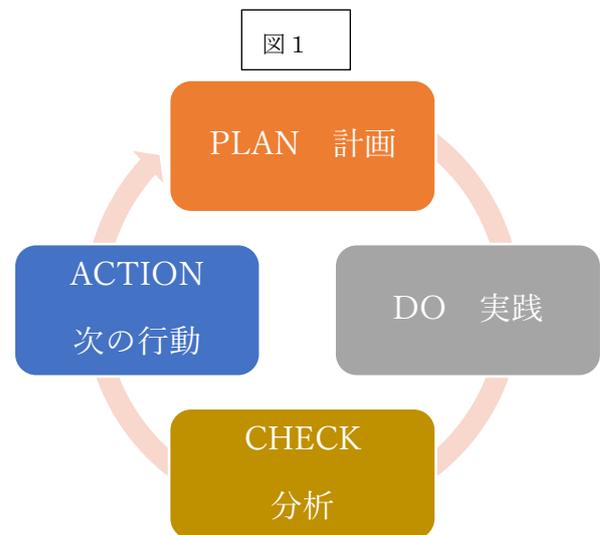
①フルーツコンクール関連事業では中高生や子育て世代など、対象となる世代が異なるイベントを実施し、アンケートでは8割以上の方から「期待以上」「満足した」「また参加したい」との回答をいただいた。引き続き、それぞれの世代に合わせたプログラムを実施することで、幅広い世代、特に若年層の興味を引き付け地域のホールとしてさらなる周知をはかる。

②子どもコンサートの公演内容を動画配信サイトで公開する(図2)ことで、当劇場の社会包摂に向けた創造的な試みを周知し、劇場の果たす社会的役割について認知されるよう広く発信する。



図2
(公開中)

https://www.youtube.com/watch?v=NJKXYe_EKUE



③神戸文化ホール開館50周年記念の「ガラ・コンサート」(令和5年5月19日)に「未来シート」と名づけた地元の中学・高校生を招待する座席を設ける、令和5年度「人材養成事業」のインターンシップ派遣の連携大学数を増加(1校)させ、産学連携ネットワークを強化して、将来の戦略的な人材確保にも活かせる体制を確保する。

④令和5年度よりスタートした3年間にわたる「神戸文化ホール開館50周年記念事業」を地域の観光資源(例:神戸港)と連携させることにより、経済的波及効果を狙う。

⑤上記「神戸文化ホール開館50周年記念事業」をトータルに広報することで、マスコミ等の露出を拡大し、ホールの知名度を高める。(同シリーズ皮切りとなった「ガラ・コンサート」は5月19日当日のNHK-TV「ニュース845」(兵庫)、20日「おはよう日本」(近畿二府四県)で報道され、日経新聞6月2日付「神戸文化ホール、50周年で連続公演 三宮移転へ集大成」との特集記事が掲載された)

⑥コロナ禍で「相談窓口」を活用した、市内の人材を活用した事業化サポートの場の育成。